

日本語と英語の談話における話法の対照研究

塩田, 裕明

<https://doi.org/10.15017/2556301>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (学術), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 塩田 裕明

論 文 名 : 日本語と英語の談話における話法の対照研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語と英語の議論的談話及び日常談話を取り上げ、それらの談話に特有な話法の談話機能に着目し、それらの話法とレトリックの関係性を明らかにしたものである。

第1章では、本論文で展開する研究の背景及び本論文の目的と意義について述べた。

第2章では、日本語と英語の話法に関する先行研究を中心に概観し、また、本研究の研究課題を提示した。

第3章では、分析のための枠組み及び研究対象コーパスについての説明を行い、また、研究対象コーパスで観察された話法を提示した。

第4章では、英語議論的談話に特有な話法の形式と談話機能を明らかにした。具体的には、英語議論的談話における伝達動詞“say”が単純過去形で用いられた話法と歴史的現在形で用いられた話法の談話機能について分析を行った。その結果、話し手は、伝達動詞“say”を異なる時制で用いることによって視点を操作し、被伝達節の引用した発話が現在時においても通用するあるいは通用しないものであることを表示し、それを、相手を論破するための自己の主張に利用していることが明らかとなった。

第5章では、日本語議論的談話に特有な話法の形式と談話機能を明らかにした。具体的には、日本語議論的談話における指示副詞が用いられた話法と分裂文の形をとった話法（話法分裂文）の談話機能について分析を行った。その結果、指示副詞を用いた話法の場合、話し手はソ系とコ系の指示副詞を使い分けることによって引用した発話を自分あるいは相手の領域に位置づけ、それを、相手を論破するための自己の主張に利用したり、論理的な言説を構成するために用いたりすることが明らかとなった。一方、分裂文の形をとった話法（話法分裂文）については、主語節内のモダリティ、テンス、アスペクトといった要素によって談話機能が異なることが分かった。例えば、主語節内にモダリティ要素が含まれている場合、意見の主張のための切り出し機能があり、一方、主語節内にテンス要素やアスペクト要素が含まれている場合、もう一度質問内容を明示する機能や、くり返し提示することによる強調機能があるなど、話し手は目的によってそれらを使い分けていることが明らかとなった。

第6章では、英語日常談話に特有な話法の形式と談話機能を明らかにした。具体的には、英語日常談話における引用標識“be like”が用いられた話法と伝達動詞“go”が用いられた話法の談話機能について分析を行った。その結果、特に前者については、引用した発話や思考をルースに解釈したものであることを標示するルース・トーク標識であると結論づけた。話し手はルース・トーク標識の“be like”を用いることで、引用した思考あるいは発話にプロソディ的、あるいは語彙的・文法的に脚色を施すことができることが明らかとなった。それは、発話や思考されたことばを一語一句引用するのではなく模倣演技のように表現するとも言える。一方、伝達動詞“go”が用いられた話法について

は、伝達動詞“go”が歴史的現在形で用いられる傾向にあり、その場合、話し手の視点は被伝達節のことばが発話された過去の時点に移動し、話し手はそのことばが発話されている場にあたかも自分がいるかのように、そして、まさに眼前でその発話が行われているのを眺めているかのようにリアルに再現することができる、あるいは、話し手がまるで被伝達節のことばの元発話者が再び発話しているかのように表現することができることが分かった。そして、これら2つの話法は、どちらも聞き手が被伝達節の引用された思考や発話が行われたときの状況、あるいは引用された思考や発話の内容を解釈しやすくなるように、またはイメージしやすくなるように話し手が配慮した結果、用いられるものであるということが明らかとなった。

第7章では、日本語日常談話に特有な話法の形式と談話機能を明らかにした。具体的には、日本語日常談話における話法で用いられる引用標識に焦点を当て、「みたいな」と「とか」を中心にそれらの談話機能について分析を行った。その結果、どちらも引用標識“be like”と同様にルース・トーク標識であると結論づけた。話し手はそれらの引用標識を用いることによって、自らの思考内容を相手の発話を要求するよう言いさし表現として引用し、会話を促進させ、また、そうすることによって対話者間で日本語の会話スタイルである共話的な会話を続けていっていることが明らかになった。

第8章では、日本語と英語の議論的談話と日常談話において話し手が用いる話法とレトリックの関係性を明らかにした。英語と日本語の議論的談話に特有な話法はどちらもダイクシスが重要な要素となることが明らかになった。話し手は視点を操作することによって引用した発話や思考に対する捉え方を表示し、それを、相手を論破するための自己の主張に利用したり、論理的な言説を構成するために用いたりするのであり、話法をレトリック的に用いていることが明らかになった。日常談話については、英語の場合、引用標識“be like”が用いられた話法と伝達動詞“go”が用いられた話法が聞き手の発話解釈を助けることにつながり、一方、日本語の場合、「みたいな」と「とか」が用いられた話法が日本語の会話スタイルである共話を作りあげるのに貢献することが明らかとなった。日本語と英語の日常談話に特有な話法についても、話し手がレトリック的に用いていると言えるだろう。

最後の第9章では、本論文の結論、研究の意義および今後の課題と展望について述べた。

本論文の意義としては、これまで共通の基盤で議論されることの少なかった日本語と英語の話法を統一的基盤から議論したこと、さらに議論的談話・日常談話という異なる種類の談話における話法の用法から、それぞれの言語の会話スタイルの類似点・相違点について明らかにすることが出来た点である。